



西見 SAIHAKKEN

福岡の特養「よりあいの森」

22日午後、1階の交流スペースで、近隣に住むお年寄りたちが集まって語らう「サロン」が開かれた。この日は近隣から70・90代の1。以前から同じ敷地内にあるカフェを借りてサロンを開いてきた。「みなさん今はお元氣ですが、もし誰かがお休みすれば、「お

# 「助け合い、人間の欲求」

宅老所のありあいは1991年、物忘れの始まった当時90代の一の女性の居場所づくりから始まった。住み慣れた土地で暮らすことを理念に、市内の民家3カ所で10人前後の認知症のお年寄を受け入れてきた。便の受けとめた自分のおなかを見て妊娠したと勘違いしたり、死んだはずの家族がいると思っていたり。そんな宅老所での出来事を一つ一つの本も出版し、不思議な共感の輪が広がった。「通い」を軸にしたより「泊まり」の二一スが高まった。でも、よりあいの泊まりは介護保険を使わない自主事業。通いを受けれられなくなり、現場も

疲弊したため、泊まりも含めて介護報酬を受けられる特養の建設に乗り出した。地域、家族、介護専門職がともに老いを地域で見守りながら、自宅での暮らしを支え、それでも無理になったらときゆつくり移り住める――。家族や賛同者たちと勉強会を重ね、そんな居場所を目指すことにした。そんな考え方に共感する

(62)は、よりお流。なんて言われますが、特別なことではない。お年寄りを主体に、その困難を解決する。社会福祉の王道です」と話す。皆で集まり、自分のできることをし、その一員でいる。おじやばりをして、助け合う。それが人間の根源の欲求みたいなものなんじゃないでしょうか

（柴田菜々子）

◆西念寺「仏涅槃図」

# 「よりあい」流の特養開設

高齢者が住み慣れた自宅や地域で暮らし続けるためのケアを実践する福岡市の宅老所「よりあい」。国の介護保険制度の枠にとられないサービスを提供する「よりあい」が今春、地域密着型特別養護老人ホーム（特養）「よりあいの森」（定員26人）を開設した。従来の特養に象徴された、大規模介護施設のあり方を問うかのように登場した「よりあい」が今なぜ、特養なのか。開設したばかりの「よりあいの森」を訪ねた。

（井上真由美）

入所型の高齢者介護施設では珍しい木造2階建て。新緑の木々に囲まれた福岡市城南区別府の住宅街の一角に、よりあいの森は新築された。支援者などから寄せられたという使い込まれた中古のソファやテーブルが温かな雰囲気を出している。全室個室。現在、70、102歳の21人が入居している。

宅老所「よりあい」は1991年、福岡市中央区の寺の一角で、92歳の独居女性の居場所をつくるため、始まった。認知症の高齢者の行き場はなく、介護する家族が疲弊していく中、行き場のない高齢者の居場所として浸透した。現在、福岡市内3カ所でデイサービス（通所介護）施設を運営している。自宅で暮らし続けることを目的に、高齢者本位のケアを実践している。

## 福岡市 木造2階建て、カフェとも連動



「よりあいの森」の交流スペースでくつろぐ入居者たち

ここ数年、デイサービス利用者の「泊まり」が増え、自主事業としての受け入れを続けてきた。次第に職員の負担は重くなり、デイサービスの運営も圧迫するようになった。「よりあいの森」は、長年の村瀬孝生さん（50）は「利用に上限がある介護保険に泊まりが組み込まれると、デイサービスの利用が制限されるし、緊急時にも対応できない」と、あえて自主事業としての受け入れを続けてきた。

「泊まり」が増えるのは歴然としており、介護保険を利用できる「1日のすみか」として特養開設に至った。ただ、通常の特養とはひと味違う。建設資金のうち約1億7千万円を賛同した市民からの寄付やカンパ、物品販売などで賄った。特養とはいえ、ケアは従来の宅老所「よりあい」と同じ。決まったプログラムはなく、入所者は自宅にいるように思い思いに過ごす。職員も入所者に寄り添ってその思いをくみ取る。

内部だけでなく、外部も「よりあい」流だ。リビングからウッドデッキでつながる先には古民家を利用した「カフェ」。地域住民が集い、多世代が集う。特養の支援者として通う人に異変があれば、職員が気に掛け、地域住民に見守りなどを働きかける。

カフェを名乗るが、実質は「地域福祉の拠点」を目指す。村瀬さんは「地域に介護を返し、将来の高齢者が老人ホームに入らないで済むための老人ホームにしたい」と強調した。

## 「地域福祉の拠点」目指す